

～草丈長く、茎数少ない！適切な肥培管理を！～

7月 日	上旬		中旬		下旬	
	1	5	10	15	20	25 30
生育	最高分げつ期		幼穂形成期		減数分裂期	
	10 葉期		11 葉期		12 葉期	
管理	中干し		間断かん水		湛水管理：カドミウム吸収抑制対策	
	湛水管理は8月下旬まで		低温時は深水管理			
作業	畦畔草刈り		～斑点米カメムシ対策～		草刈禁止期間※	
	※9月上旬まで。ただし出穂期10日後頃の薬剤散布後7日以内に一度草刈りを実施する。					
	葉いもちが発生した場合		ブラシン剤かノンプラス剤を散布		ビーム剤の追加防除	
				穂いもち防除を実施する場合		コラトップ粒剤

1 7月5日現在の生育状況

○7月5日現在の生育は、草丈は
平年比110%と長く、茎数は平年
比71%と少ない状況です。

また、葉数は平年差+0.3葉とやや多く、葉色は平年比104%と濃くなっています。

○仙台管区气象台が令和4年7月7日に発表した、東北地方の1か月予報（7月9日～8月8日）によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並みか多い見込みとなっています。

○高温・多湿はいもち病に感染しやすい気象条件です。ほ場の見回りにより葉いもちの発生が確認された場合は、薬剤による防除を速やかに実施しましょう。

表1 水稻定点調査結果(農業振興普及課)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)
本年	52.9	457	10.3	46.8
平年値	48.2	648	10.0	45.0
平年比	110%	71%	+0.3	104%

品種：あきたこまち、管内5カ所平均

2 水管理 ～ カドミ対策の湛水期間は7/15～8/25が目安 ～

○中干しは、遅くとも幼穂形成期前までには終了します。その後はカドミウム吸収抑制対策として、出穂前後各3週間の7月15日頃から8月25日頃まで湛水管理を徹底してください。

○幼穂形成期以降、障害不稔の危険性がある低温（平均気温20℃以下、最低気温17℃以下）が予想される場合は、水深10cm程度の深水とし、幼穂の保護をはかるようにします。

○最も低温に弱い時期は、出穂10日前頃の減数分裂期です。低温時は15cm以上の深水管理を実施します。

3 追肥 ～ 幼穂形成期の生育・栄養診断を実施しましょう ～

幼穂形成期の生育による追肥の診断(暫定案)

生育型	生育過剰	理想的な生育	生育不足
草丈 (cm)	65 cm以上	60～65 cm	60 cm以下
葉色 (SPAD502) (葉色板)	42以上 (5.5以上)	39～42 (4.5～5.5)	39以下 (4.5以下)

追肥 (N成分)	幼穂 形成期	なし	ムラ直し1 kg/10a	1～2 kg/10a
	減数 分裂期	なし	1～2 kg/10a	1～2 kg/10a

注) あきたこまち、目標収量 570kg/10a

幼穂形成期(幼穂2mm、7月15日頃)の極端な葉色低下は、1穂粒数の減少・有効茎歩合の低下を招きます。幼穂を確認し、表を参考に生育・栄養診断を実施して下さい。

- 幼穂形成期に草丈65cm以上で葉色が濃い場合は、穂肥は控えます。
- 幼穂形成期に草丈60～65cmで、葉色の低下が見られる場合は、減数分裂期(葉耳間長±0cm、7月25日頃)主体の追肥を実施します。
- 幼穂形成期に草丈60cm以下で、葉色が低下している場合は 幼穂形成期(7月15日頃)と減数分裂期(7月25日頃)の追肥を実施します。
- 一発型の肥料を施用した場合は、基本的には追肥は控えるようにします。

4 病虫害防除 ～ 畦畔等の草刈りを徹底して斑点米カメムシを抑制～

①いもち病

- BLASTAM(アメダス)の判定では、管内では、6月27、29、30日及び7月1日に感染好適条件が観測されています。ほ場の見回りにより早期発見に努め、病斑を発見したら直ちに予防剤と治療剤の混合剤(ブラシン、ノンブラス)を散布して下さい。
- 葉いもちが多発しているほ場では、出穂15～7日前にコラトップ剤またはゴウケツ粒剤(サンブラス粒剤)を散布するか、出穂直前にビーム剤(またはトライフロアブル)と穂揃期にラブサイド剤(またはトライフロアブル)で茎葉散布を行います。

②斑点米カメムシ

- 畦畔や農道等の草刈りは、出穂10日前までに徹底しイネ科雑草の除去に努めます。
- 水田内にホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエの残草があると、アカスジカスミカメの侵入を助長するので、水田内の雑草対策を徹底しましょう。

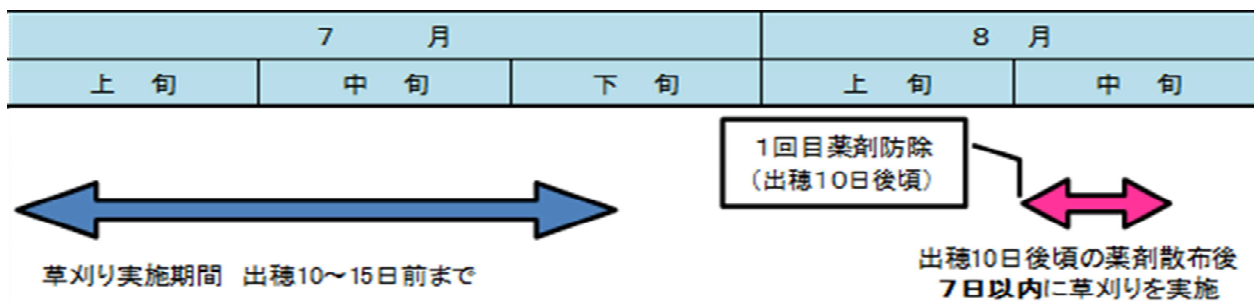


図1 農道・畦畔の草刈り時期